



(標準様式～裏)

観点							
1.  ニーズの状況変化	<p>● A ○ B ○ C ○ D</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キク、リンドウなど仏花は、気象条件に左右されず需要期に安定した定量出荷の確立が、生産者、市場及び消費者から求められている長年の課題である。試験研究へのニーズは高い。</li> <li>・県内では施策により、メガ団地などにおけるキクの生産が増加し、大規模栽培体系では、省力化へ向けた一斉収穫のための開花調節技術の開発や機械化栽培体系の確立へのニーズがある。</li> <li>・県の施策では周年園芸の普及拡大を推進している。ダリアは他の品目に対して比較的低温で管理できる周年栽培可能な品目であるが、寡日照条件下では、品質の低下が問題となっている。他産地との競合があるため、さらなる低コスト化および品質向上へ向けた栽培技術の確立へのニーズは高い。</li> <li>・ダリアは、施策により輸出を含めた販路拡大を計画しているが、切り花として鑑賞期間が他品目よりも短いため、遠距離輸送に耐えうる日持ち性向上技術の開発へのニーズがある。 (委員の意見)</li> <li>・本県の重点戦略品目であるキク、リンドウ、ダリアの生産安定・品質向上技術は、ブランド化を進める上で喫緊の課題となっているため、現場ニーズを的確に捉えている。</li> <li>・開花調整技術や機械化といった具体的なニーズがある。</li> <li>・花きの場合、出荷時期により、単価が大きく異なることから、開花調整技術の確立に対するニーズは、相変わらず高くなっている。</li> <li>・メガ団地の品目として、キク、リンドウ、ダリア等の大規模生産に取り組む法人等もあり、それぞれの現場の栽培技術の課題に、きめ細かく対応することが重要である。</li> </ul> <p>A. ニーズの増大とともに研究目的の意義も高まっている      C. ニーズの低下とともに研究目的の意義も低くなってきている B. ニーズに大きな変動はない      D. ニーズがほとんどなく、研究目的の意義がほとんどなくっている</p>						
2.  効果	<p>● A ○ B ○ C ○ D</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キク及びリンドウは、本県花き生産の主要品目であり、需要期の安定した定量出荷の確立は、農家経営の安定化に十分貢献できる。</li> <li>・キクは、本開花調節技術を利用することにより、機械等を用いた一斉収穫が可能になり、省力化となるため大規模経営の安定生産に貢献できる。</li> <li>・ダリアは冬期栽培技術の確立により、周年安定生産が可能となり、作付け面積が拡大し、生産者の収入アップが期待される。</li> <li>・ダリア切り花の日持ちが向上し、販路が拡大され、生産者の収入アップが期待される。 (委員の意見)</li> <li>・キクの開花調節技術、リンドウの高温障害の解明、ダリアの冬期栽培技術確立や日持ち向上技術の確立は、市場及び生産者ニーズを十分に満たすことから、大きな効果が期待できる。</li> <li>・新たな栽培技術を確立することで、需要期の集中出荷や、日持ち性の向上など、生産者の収入UPが期待できる。</li> <li>・研究している技術は、それぞれ産地の維持拡大と農家所得の向上につながるものである。特に、ダリアの品質保持技術の確立については、早急な成果が求められる。</li> <li>・盆、彼岸需要期への適期出荷ができることで、安定した販売収入が得られ経営安定に役に立っている。</li> </ul> <p>C. 小さな効果が期待される B. 効果が期待される      D. 効果はほとんど見込めない</p>						
3.  進捗状況	<p>○ A ● B ○ C ○ D</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小ギクにおいて、電照栽培による本県の盆および彼岸需要期に集中出荷が可能と考えられる数品種の選定を行い、夏秋小ギク7品種中4品種が盆需要期出荷可能で、7品種すべてで秋彼岸出荷可能であることを明らかにし、栽培試験を継続して行っている。</li> <li>・リンドウの秋彼岸出荷向け品種「しなの3号」において、障害花の発生する温度条件(平均気温27℃)で約23%の花蕾で中～軽度の花焼け症が発生をした。継続して、障害花が発生する温度域と光条件について検討している。</li> <li>・ダリアの冬期栽培技術について、冬期間の低温管理及び変温加温方法によるダリアの開花と切り花品質への影響について試験を行っている。</li> <li>・切り花の日持ちを向上させる鮮度保持剤及びその濃度について検討し、品種による効果の差異を明らかにした。継続して、鮮度保持剤を処理するのに適する採花時の開花ステージについて明らかにする。</li> <li>以上のように、計画は順調に進んでいる。 (委員の意見)</li> <li>・キクについては、電照処理による開花調整が可能な品種の選定ができたため、計画どおりに進んでいる。リンドウの障害花発生の軽減策は品種改良に委ねての対策が効果的と判断されることも考えられるため、早期に解明をお願いしたい。ダリアの日持ち向上技術については、鮮度保持剤のほか、品種そのものの特性が日持ちに大きな影響を与える。特に輸出については長時間輸送となることから、輸出適応品種についても整理が必要。</li> <li>・小菊の開花調整技術が確立できた。その他、ほぼ予定通り進んでいると評価できる。</li> <li>・概ね計画どおり進捗していると判断される。</li> <li>・リンドウの花弁の障害、ダリアの冬期栽培時の品質低下など、解決に時間を要する課題もあるが、生産現場とコミュニケーションを十分とって研究を進めることが重要である。</li> </ul> <p>A. 計画以上に進んでいる      C. 計画より遅れている B. 計画通りに進んでいる      D. 計画より大幅に遅れている</p>						
4.  害目要標況困達の成状阻	<p>○ A ● B ○ C ○ D</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・リンドウの障害花の発生は、基礎的な生理生態の解明のため、時間を要する試験研究と推察される。 (委員の意見)</li> <li>・ダリアの日持ち性向上の定量的目標値(市場ニーズ)を調査・検討していただきたい。</li> </ul> <p>A. 目標達成を阻害する要因がほとんどない      C. 目標達成を阻害する要因がある B. 目標達成を阻害する要因が少しある      D. 目標達成を阻害する要因が大いにある</p>						
総合評価	<p>○ A 当初計画より大きな成果が期待できる ● B+ 当初計画より成果が期待できる ○ B 当初計画どおりの成果が期待できる ○ C さらなる努力が必要である ○ D 継続する意義は低い</p>						
<p>評価を踏まえた研究計画等への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・リンドウにおいては、県オリジナル品種も導入し、障害花発生条件の解明に取り組む。</li> <li>・周年安定生産の確立ではダリアについて、低温管理および変温管理を行い、それぞれの品種における反応を明らかにする。併せて、日持ち性向上の定量的目標値を調査・検討する。</li> <li>・引き続き、生産現場や関係機関とコミュニケーションを取りながら栽培技術の開発について研究を進めていく。</li> </ul>							
(参考) 過去の評価結果	事前 B	中間(年度)	中間(年度)	中間(年度)	中間(年度)	中間(年度)	